

# 令和2年度 協働のまちづくり活動支援事業公開プレゼンテーション

## <事業内容・質疑応答>

### 1 あそび場創造プロジェクト



#### 【事業名】 あそび場を増やそう

##### ◆事業内容

えべつあそび場創造プロジェクト、団体名が長いので、「あそプロ」とする。あそプロのこれまでの活動を簡単に説明する。

えべつあそび場プロジェクトとは、地域に住む子ども達にあそび場の提供、あそプロに登録している各あそび場施設にて、毎月1回日曜日に地域の子も達を対象としたあそびの会を開催している。あそプロ所有のおもちゃで、子ども達に自由に遊んでもらう会。参加した子ども達は、普段と異なるあそびができることを喜んでおり、有意義な事業であると実感している。

昨年度までの事業として、平成31年度は、地域にあそび場をつくる目的で、介護付き有料老人ホーム連音（れのん）をあそび場とし、しらかば自治会と連携してあそびの会を9回開催した。本年度事業である「あそび場の増加」を先行し、静苑ホームを2箇所目の拠点として登録、あそびの会を3回開催した。また、地域への周知を強化するため、野幌若葉、新栄台、新栄台東の各自治会と連携、チラシを回覧板で回してもらった。あそびの会ではコーヒーを格安で提供、大人用のおもちゃや談話用スペースを設け、同伴する保護者がくつろげるよう工夫して、参加した誰もが楽しめる場を作れた。また、あそび場施設の特徴を活かした遊びを実施し、施設と地域住民の交流促進を図った。参加人数の実績は、78家庭208名。

更にあそび場の登録拠点を増やす事が本年度の事業の本題になる。課題・ニーズとして、昨年度までは、子ども達、保護者、地域施設の悩みに応える活動を行ってきたが、本年度は、活動を通して見えてきた事を課題としている。

まず、あそび場が足りない。現状は、連音と静苑ホームの2か所であそびの会を開催しているが、ここにあそびに来られる地域は、地図で表した地域。江別市内の非常

に限られた地域・範囲しか、カバー出来ていない。

次に、人・モノが足りない。あそび場を増やしても、開催するノウハウを持ったメンバーが足りないし、急に増えることは期待できない。もしそれが解決しても、あそびの会を開催しても、おもちゃが足りない。そのため、ただあそび場を増やすだけではなく、何らかの工夫が必要。

次に、小さな子どもも遊びたい。あそプロのおもちゃのほとんどは幼児または小学生向け。あそびに来てくれる子どもの中には未就園児もあり、その子達が遊ぶおもちゃが現在はない。

次に、未就園児対応のノウハウがない。自分の子どもが大きくなり、最近の乳幼児がどのようなおもちゃを好むのか、どのような物を与えてもよいか判らない。そもそも、おもちゃを与えるだけでよいか、という問題もある。他にも、所々考慮すべき点があるはず。そのため、経験を持った人の助力が必要だと考える。

課題・ニーズを踏まえた事業の説明をする。

まずは、あそび場を増やさなければ始まらない。昨年度に引き続き、江別市内にある施設を訪問し、あそび場として利用させてもらえるよう交渉を行う。子どもたちの健全育成が図る事が出来て、気軽に足を運べる場所に位置している施設が対象。このプレゼンテーションを見ている方で、もし「うちの施設を使ってもいいよ」「近所にこんな施設があるよ」といった話があれば、ぜひ情報提供をお願いしたい。

次に、あそび場の協力。昨年度のあそび場施設の役割は「場所」を提供することが主になっていた。これを見直して、あそび場施設の方々にも「会の運営」をしてもらい、人材不足による負担を軽減する。

次に、おもちゃの貸し出し。あそび場施設には子どもが遊ぶようなおもちゃはない。そのため、あそプロ所有のおもちゃを貸し出し、それを使用してもらい、あそび場施設の負担を軽減する。いきなりあそび場施設に実施してもらう事は難しいため、本年度は、最もあそびの会の実施実績がある蓮音に協力してもらい、ノウハウを蓄積する。

次に、他団体との連携。あそびの会のすべてをあそプロ単体で頑張るのではなく、ノウハウを持っている他団体と連携して負担を抑える。例えば、未就園児対応であれば子育て支援ワーカーズきらきら、外あそびであればプレーパークを開催している生活クラブの力を借り、小学生の室内あそびならあそプロの力を貸し、互いに協力したいと思う。他にも自治会への周知依頼や、市の子育て支援センターとのノウハウ共有等、連携の可能性は多岐に渡る。

収支予算について説明する。収入は、151,800 円を計上している。内訳は、協働のまちづくり活動支援事業による補助金を 10 万円、自己負担 48,000 円、コーヒー売上と募金は、昨年度実績からそれぞれ 2,400 円、800 円を見込んでいる。支出の内訳。まずはおもちゃ。109,000 円と大きな数字になっているが、これは連音へ貸し出す用のおもちゃ、保管用のケース購入、破損品の補修や更新分も含んでいるため。破損品の更新については、昨年度は、殆ど私物提供と修理で済ませていたが、予備がなくなってきたので、費用として計上している。保険加入だが、意外と低費用となる。複数回のあそびの会を纏めて契約することで、1 回当たり約 300 円になった。今年度は連音と静苑ホームで開催予定の 14 回の他に、2 回程度開催することを見込んで 16 回、4,800 円としている。コーヒー代。保護者に美味しいコーヒーを飲みながら一息ついて欲しいという想いを実現するために計上しているもの。また、参加した子ども達が飲むジュースと、クリスマスなど特別な時だけ配るちょっとしたおやつ代も含んでいる。広告費だが、毎月のチラシ・回覧板用のトナー代を計上している。用紙は昨年度

寄付していただいたので、予算には入れていない。また、年間予定を記載したチラシは良い紙にするので、業者作成を検討中。その他、衛生用品やマスク等の購入、食器の補充費用として7,000円を計上している。支出合計は151,800円。

次に、あそびの会の予定。蓮音（れのん）は、毎月第3日曜日13:00～15:30に開催予定。静苑ホームは、毎月第2日曜日13:00～15:30に開催予定。あそびの会の登録施設は高齢者の施設が多いので、新型コロナウイルスの対策としては、施設の指示に従って、開催日程を決める所から始まる。そのため、施設から開催禁止の指示が出た場合は、中止することもあり得る。外あそびも今年度計画中。市から使用許可を得て、あさひが丘の沢地で開催予定。原状復帰出来れば自由使用可との事、普段出来ないあそびを楽しんでもらおうと考えている。これは秋頃に実施予定。この他、あそび場の増加があれば、そちらでも開催していきたい。

今後に向けては、【誰でもあそび場は作れる】昨年度の事業を実施し、あそびの会は2名程度で開催でき、かかる費用は保険代、コーヒー等の飲み物代の、1回あたり1,000円程度。負担のかかるものではないことが分かってきた。おもちゃを買うにはお金がかかるけれども、あそプロからの貸し出しや、今後不要なおもちゃの回収を行う事業を新たに開始出来たら、軽減出来る見通し。あそプロのノウハウ提供により気軽に活動を始められる点の共有が進めば、協力の輪が広がるかもしれない。来年度、ノウハウを広める活動をするためにも、本年度の準備が重要と考えている。

最後に、江別市にあるお店や企業の施設に、地域住民が気軽に集まり、いつでも子どもが遊べるようになっている状況は、素敵だと考えている。子ども達が近所の施設に興味を持って関わりを持ちたいと考え、地域に住んでいるという帰属意識が芽生え、江別に住もう、働こう、そして自分たちが次のあそび場の提供を考えてくれたら最高だと、そんなことができたらいいなという思いで活動を続けている。

以上で、えべつあそび場創造プロジェクト、略してあそプロの、令和2年度事業「あそび場を増やそう」のプレゼンテーションを終わる。

#### ◆質疑応答

【選考委員】あそび場には、どこの学校の生徒が来ているのか。

【発表者】（参加者の）学校の特定はしていないが、蓮音は、東野幌小学校、若葉小学校。静苑ホームは、対雁小、中央小だと思う。

【選考委員】今回のコロナの状況で、施設の活用について、2つの施設であったら、規模としては少ないと考えていた。今後、紹介して欲しいとあったが、待っているだけではなくて、どの様にしていっていいかという考えはあるか。

【発表者】自分で探しに行つて、声掛けをしている。去年まではその方法だったが、今年は、外部から情報を貰い、交渉してみたい。既に、2箇所程ピックアップしている所がある。

【選考委員】大変だと思うが、頑張つて欲しい。もう一つ、プレーパークという事で、市から許可を貰って、東野幌小学校の沢を使う様だが、具体的なやり方は考えているか。

【発表者】具体的な内容・日程までは、まだ詰められていない。学校で、指導者の募集も行う予定。学校には協力して貰えそうだが、あくまで学校外の事なので、任意で募集する。手伝ってくれる人がいれば、一緒にやっていきたいと考えている。

【選考委員】まず、ノウハウを作って広めたいという事で、現在スタッフは4名の様だが、あそびの会は2名で可能とあったが、4名以上で実施体制を充実していく予定はあるか。

【発表者】メンバーは、増やせるので有れば増やしたいと思う。ただ、去年も、4名から実は増やせなかった。どうしたら増やせるのかと考えてはいたが、拡大するよりも拡散する方がいいと思っている。ノウハウを提供し、自力でやってもらう事を今年度は目標としたので、そこまでのメンバーの拡大は不要と考えている。

【選考委員】飲み物等を格安で提供しているが、経費はかかると推測する。ある程度収入が安定しないと、継続が難しいのではないか。諸経費を代表が負担している事はよくあるケースだが、収支に関して、どういう計画を持っているか。今後の展望も含めてお聞きしたい。

【発表者】去年もその話があった。資金集めの手段を考えていくのが課題ということで、ご指摘の通りだと思う。1年間の気づきとして、まず、おもちゃ購入費用はかかるが、それ以外は、1回につき1,000円程度の経費。コーヒーの売上収入が数百円あり、差し引くと、1回の費用が、5~600円程度で大きな負担ではない。自己負担はあるが、大きな問題にならないと考えている。おもちゃにお金がかかるというのは確かにあるが、これは、回収する仕組み、不要になったものの寄付の仕組みが出来れば、自然と解決していくと考える。今回のプレゼンテーションでも「負担の軽減」という用語を何度も出したが、大勢で少しずつ頑張る事で、負担を小さくしていきたいと考えている。

【選考委員】最後に、こちらの補助金等について、万が一、これがゼロだったらどうするか、もしくは、申請いただいた金額より削減されてしまったらどう考えるか。

【発表者】ゼロだった場合だが、おもちゃの購入が出来なくなるので、貸し出しが出来ず、その部分は新しい事は出来なくなる。現在ある、昨年度予算で購入した分と、元々家にあったおもちゃが主になるので、昨年度通り実施していく事は可能。開催にかかる費用は大きなものではないので、規模拡大は出来ないが、昨年度と同様にあそびの会を実施していく。

## 2 ACネットワーク研究会



### 【事業名】小中学生のラジオ職業体験事業

#### ◆事業内容

私達の今回の取組みとしては、小中学生の、ラジオの企画構想と出演を通じた職業体験を通してスペシャルな体験をしてもらうという事がテーマ。事業の要旨は、江別市内の小中学生に募集をかけ、ラジオ放送の出演や企画をする職業体験で、大きな取組みになる。実際の放送でオンエアになるという特別な体験として募集する。体験では、放送内で話す事や、放送の企画内容自体を一緒に考えてもらう。大人の運営スタッフもいるが、一緒に放送を成立させるということ、自分達がパーソナリティとして、オンエアに声に乗るという一生に一度あるかという貴重な経験を、スペシャルという言葉で表している。

ここで団体の説明をさせていただく。ACネットワーク研究会は2014年から大学生と連携した食育を発端として活動している。ACの意味は、アグリカルチャーとコンテンツ。コンテンツとは、ここでは、地域の食の魅力発信という事を指す。食育については、子ども達に大学生と一緒に畑を教える活動がスタートだったが、野菜料理の体験等も含めて「野菜をもっと食べよう」「健康都市」という江別市のテーマとマッチしていると思う。また、様々な職業体験のイベントの中でも、子ども自身が楽しめる縁日の運営もやっている。食育は一つの軸とした上で、沢山の住民が触れ合い体験する機会を作ることを、私達の活動の中心にしている、近年、会則を変え、ACの意味を、野菜や食育という意味合いのアグリカルチャーと、コミュニケーションという解釈にした。冬季は、除雪機にのる体験、除雪を指導する体験も行っている。一緒に外に連れ立って、実際の職業に繋がる様な、身体を動かす活動を行っている。

今回事業のスキームだが、昨年来、学習塾とのタイアップをして、スタッフを通して、小中学生へ募集をかけている。応募してきた子どもと、まずラジオの企画を考える。流す曲の選曲や、リスナーとの掛け合いの具体的な内容を、子ども達に考えてもらう。実際の放送においては、パーソナリティ、音響、ミキサーといった裏方の仕事等、様々なものがある。インターネットで全国配信出来るのだが、全国のリスナーからすぐリアクションがある事が、子ども達にとって、非常に珍しい体験だと思う。新

さっぽろの地域 FM、FM77.6MHz は、サンピアザの中にスタジオがある。スマートフォンでも聞ける媒体で全国デビューをするという大きな舞台である。

今回のまちづくり活動支援を受けて事業を推進するポイントとしては、本放送用のスタジオ料金への補助が一番大きい。昨今は、ゲーム等のバーチャル体験が増えている中、本物を体験する事が大事だと私達は考える。また、従来の学習塾との連携も、実際の働きに見合う謝礼を払う事にした。また、支援事業になることで、一部の学校にしか広報出来なかったが、江別市全体の小中学生にチャンスを広げる事が可能になる。

予算の効果として、スタジオの使用料について、2回分計上している。従来だと、協賛金集めや企業への説明に多くの時間を割いていた。予定金額が集まらなかったら実施が出来ないので、早い時期での募集が出来なかった。この部分が安定することで、早期の実施および実現性の確定に繋がる。また、コーディネーターへの謝礼を支払う事で、協力という成果を問えない関係性から、実現へ向けての責任を持った関係性を築くことが可能になる。チラシの印刷は、全市的に周知をしていくために必要。新型コロナ対策の部分として、参加者へのマスクを配る、また、従来家族へ CD 化した音源を手渡ししていた物を郵送とする。

まとめとして、ゲームの氾濫や情報化、そしてコロナの中、子ども達が将来に夢を持って、ホンモノの体験をする事が、心の成長に非常に大事であり、自己肯定感を育む事にも繋がっていくのではないか。実際のスタジオで実際の放送を自分達で経験するのは、一生に何回も無い様な貴重な機会である。実は、知り合いのアナウンサーから、全国的にもこういう取組みは希少だという指摘も貰った。

#### ◆質疑応答

【選考委員】子どもの教育的にはとても良い取組みだと思う。希望者が沢山出た場合はどうするか。

【発表者】おっしゃるように、支援事業としての幅広い告知により、希望者が増える可能性がある。募集が多い場合は、裏方等も含めた様々な仕事に関わってもらおうという事で、それも一つの職業体験と考えている。また沢山募集があった場合は基本的には全員を受け入れ、放送の回数を増やす可能性がある。また、放送自体が無くなるという可能性はほぼ無い。更に、親御さんが、スタジオに行くのが不安だ、江別から札幌圏に行くのが不安だといった場合に、インターネットの Zoom システムを使い、自宅から収録するという事も可能である。追加別紙の説明の中に、当団体の技術等の記載があるが、放送局にインターネットで中継する仕組みは、放送局側からの提案ではなくて、AC ネットワーク研究会が初めて提案して実現している事で、この仕組みを使って全国からゲストに出る可能性にも繋がっている。

【選考委員】スタジオの関係。話の中に、協賛金を以前は集めたという話だが、スタジオ費用が多額な金額だと思う。私自身の情報だが、江別市の4大学の中に情報大学があるが、その中にスタジオの設備があったと思う。連携、交流を図りながら、費用も削減出来ないのか、協力体制を取ってはどう思っている。

【発表者】この事業で「本物体験」とうたっている所は、FMの放送免許を持った放送局から全国に配信しているという点なので、情報大学のスタジオが、収録が出来るスタジオで、ネット配信出来る範囲なのか、実際のFM電波に乗せて、全国の放送免許を持った施設かという点が重要になる。回数が増えて協賛金を集めなければ成り立たない場合、スタジオで収録したものを、本放送の枠の中に圧縮して放送する様な工夫等、コストの削減に勤めていきたいと思うが、情報大学の中が、放送免許を持って全国に発信出来るかというのは、これから調査する。

【選考委員】一度見学に行っているが、素晴らしい施設だ。是非見学に行っていたきたい。この取組みは、様々な地域でこういった情報関連の活動をしているので、進めていってもらえたら、子ども達の為に良いと思う。

【選考委員】とてもユニークな活動をしていると思う。説明の中にはなかったが、関わっているスタッフの人数が、とても少ない様に思う。今後どの様な予定があるか。

【発表者】スタッフ人数は、ACネットワーク研究会で3名、学習塾で3名、放送に直接携わったり普段スタジオ運営に関わる人間が4名になる。

【選考委員】意外に沢山の人でやっている。

【発表者】色々な役割が有ることを、児童にも理解してもらっている。

【選考委員】次に、面白いと思うが、職業体験として、子ども達に、今後の人生に役に立っていくのではないかと思うが、いわゆる時間がかかる、成果として実っていくのに多少時間がかかる様に思う。時間を待つ所があると思った。また、前年度は小学校2つにしか声を掛けられなかったが、今年度は江別市全体の小学校に周知するという話だが、どのような方法をとるのか。

【発表者】まず、職業体験の即効性というか、どういうタイミングで効果が現れるかという点については、あくまでも22歳になって初めて職業のことを考えるのではなくて、小学生の高学年、ないしは中学生くらいに自分の将来を描く事を考える機会と捉えている。将来の職業を意識し始めるというのは12~13歳くらいがいいのではというのが私達の考えである。私達がどちらの世代を重視するかと言えば、小中学生のうちに職業体験をして貰う事を優先的に考えていた。効果が出るのが22歳から、24歳からという部分だが、高等教育に進む段階で、将来への意識を醸成する事が非常に大事だと思う。大学入学時に、何も目的意識がなく、将来への志向が曖昧であるよりも、途中で変わったとしても、ある程度、学校の先生になりたかったとかの将来像を描きながら進学する方が、勉強の目的自体にも良いと考えている。また、引っ込み思案の子が、エントリーしてくる。こういう特別な機会、テレビやラジオの向こうの世界を体験してみたいということで、結構引っ込み思案な子が来る。打合せの時に、ぼそぼそとしゃべっていた

り、自分で発案しない様な子もいるのだが、「辞める？」と聞いても辞めない。手の上がった子どもが、勇気を持って新しいことにチャレンジする事自体が重要だと思う。親御さんからは、その後も感謝をされ、物事に積極的に考えるようになってきたという話を伺う事もある。それから、やり遂げた後の満足感が自己肯定感を醸成するという事が大事ではないかと思う。児童によく言うのだが、例えば学校で勉強しただけでは目と手しか動かさないけれども、スタジオに行って大人と喋ってというのは五感を使う。色んな空気感もあるし、大人と折衝することもあるし、すごく思い出になるという部分がある。そういった意味では、こういうチャレンジを自分は出来るんだという自信に繋がっている、むしろそちらの方がより感じる事がある。江別市全体に働きかけるという意味では、チラシ印刷の費用も計上しており、江別市の支援事業になれば、学校に対してオフィシャルとして児童に告知が可能になる。無料の SNS を使いながらの募集もやっていきたいと思っている。

**【選考委員】** プレゼンテーション内には無かった事で資料の中に入っていたのだが、AC ネットワーク研究会は、長期的にはむかわ町への震災の視察等が書かれていたのだが、それはどの様な意味をもっているのか説明して欲しい。

**【発表者】** 小中学生の職業体験として始めた時に、スタッフの間では、子ども達が取材をして自分達で取材先を決めて取材に行く所から関わらせたいという構想があった。それは地震の前だったのだが、地震の時、私がボランティアで震災の支援に行っていた。その時のつてがむかわ町にあり、向こうからもボランティアとして指名される関係性が出来たので、取材等を提案出来る土壌がある。被災地の継続した支援という部分と、子ども同士で違うエリアと交流する事の実験値も大きいと思う。このスキームが軌道に乗った時に、子ども同士が自発的な助け合いや交流の機会を作るきっかけになる可能性がある。実際のオンエアに乗るから取材に行きたいという話なら、受け入れ側も、交流の場をつくらうかという姿勢に繋がるのではというのが私の思い。

**【選考委員】** 全員に質問しているが、今回の助成金が、万が一ゼロだったらどうするか、または減額されたらどうするか。

**【発表者】** 補助金が下りなくても事業は実施する予定。ただ、その場合、実施が不確定になると、回数が減る、従来実施していた小学校の校区しか出来ない、今年のミッションである、市内の全体に募集をかける所が縮小になる。



## <選考委員の総評>



左から、尾形委員（北翔大学生涯スポーツ学部健康福祉学科 教授）  
武田委員（江別市自治会連絡協議会 会長）  
工藤委員（江別市女性団体協議会 会長）

【尾形委員】2団体の話を聞いて思ったことは、現役でバリバリ仕事をしている男性お二人が、子育ての経験などを基に地域のために何かやろうと立ち上げて、ものすごく熱心に取り組んでらっしゃる姿が印象的で感動的でした。協働のまちづくりは、想いがないとすべて始まらないというところがあって、みんなで江別の子どもたちを大切に育てていこうとしている素晴らしい市民がいるなということに感動を覚えました。しかも、お仕事で培ったのだと思いますが、緻密に企画を考えられていて、プレゼンテーションも良く組み立てられ、質問にも的確に答えられている。その力を地域活動に注いでいることが素晴らしいと思いました。

【武田委員】今年度は2件と少ない件数でしたが、どちらの発表も甲乙つけがたく素晴らしい発表でした。どちらの団体にも頑張ってもらいたいと思います。

【工藤委員】あそび場創造プロジェクトは、自分だけでやっていくのではなく、最終的には施設ごとに役割を分散していき、多くの協力を得て事業を達成しようという事に感銘を受けました。ACネットワークは自分がボランティアで地域交流をしてきたことを活かして協働のまちづくりをしていくという事に感銘を受けました。